



## 学習院の 名情景

第4回 前川國男の建築物

キャンパスに遺る数々の馴染み深い場所をご紹介していくこのシリーズ。第4回は建築家 前川國男が手掛けた学習院大学校舎です。日本近代建築の歴史に大きな足跡を残した前川國男の建築思想は、今も目白の杜に息づいています。



中央教室(手前)と本部棟(左)。奥に見える建物は南2号館として現在も使用されている

激動の20世紀を生き抜き、日本の近代建築の草創と定着に努めた前川國男（1905《明治38》～1986《昭和61》年）。東京帝国大学工学部建築学科の卒業証書を手にした後、すぐさまシベリア鉄道経由でパリへ渡り、近代建築の巨匠 ル・コルビュジエ（1887《明治20》～1965《昭和40》年）のアトリエに学びました。帰国後、アントニン・レーモンド（1888《明治21》～1976《昭和51》年）の事務所を経て独立。ル・コルビュジエの元で「近代建築の旗手」として戦う姿勢を学んだ前川國男は、常に日本の〈近代建築〉とは何かを考え、与えられた要求に対してより良い解答を発見しようとする独自の建築思想を追求したといわれています。

1958《昭和33》年、その建築思想を見込み、大学校舎の建築を依頼したのが学習院長安倍能成（1883《明治16》～1966《昭和41》年）でした。自ら依頼に向く姿勢からは、戦後間もなく仮校舎

だった学習院に、新しい秩序と雰囲気を生み出したいという強い信念がうかがえます。こうした学習院側の熱心な働きかけにより、前川の手で1960《昭和35》年、中央教室（ピラミッド校舎）が誕生しました。建築物単体ではなく建築群としての佇まいや空間を大切にしていた前川は、中央教室を中心に本部棟・北1号館・南2号館を建設し、さらに大学図書館も設計（現存している建築物は北1号館・南2号館・大学図書館）。複数の建築物と広場から構成さ

れる校舎群全体をデザインしました。中央教室は四方を建築物に囲まれながらも開放感を保てるよう四角錐形にし、教室という機能上、内部空間に柱や梁を使用しませんでした。

「安い絹より丈夫な木綿を着よう」を合言葉に、堅実な学園の実現を目指して進められた学習院大学校舎群の設計。現存している校舎や図書館では今なお、多くの学生が希望に胸を膨らませ勉学に励んでいます。



中央教室内部

学習院大学図書館(右)はコンクリート打放しの重厚感ある外観を持ち、今もなお図書館として多くの学生や教員が足を運ぶ



## 学びと出逢いにあふれた青春時代。 いつも私を温かく、大きく包み込んでくれた学習院。

サポーターズ会員No.0521

津村 節子 (学習院大学短期大学部文学科国文学専攻 卒業1953年)

私は昭和二十六(一九五一)年、学習院大学短期大学部文学科に入学しました。戦時中の女学校時代は防空訓練、教練、農場作業などで正規の授業は二年間しか受けられず、四年生からは学徒勤労働員で東京都大田区下丸子の北辰電機で、巨大な軍艦に設置する羅針儀の接続筐の配線をしていました。

昭和二十年三月戦時特例により四年生で五年生と一緒に繰り上げ卒業。八月十五日敗戦。夥しい男性が還らぬ人となり、これからは女性が働かねばならぬと覚悟しました。目黒のドレスメーカー女学院で洋裁を学び、疎開先の埼玉県入間川町(現・狭山市)で洋裁店を開業。町の女性たちは和服を洋服に更生する仕事を、陸軍士官学校に進駐してきた米軍将校の夫人たちはP・X(Post Exchange:米軍基地内の売店)で求めた服地とオーダーブックを持ち込んで来て多忙を極めました。学力不足のコンプレックスに悩んでいた私は、新聞で学習院大学に短期大学部が設けられたことを知り、高等女学校卒では受験の資格がないので新制高校卒業の認定試験を受けねばなりません。五年も遅れて試験を受けたいというのは私だけで、一人の受験生のために四人もの先生方がお出で下さり、赤煉瓦の旧兵舎の一室で筆記試験を受け、口頭試問の時に、戦時中勤労働員で勉強出来なかったことを延延と訴えると、これから頑張ってください、と先生がコートを着せかけながら言われた時の嬉しさ、涙が床に滴り落ちたことを今でもよく覚えています。

入学して私はガリ版刷りの校友雑誌を出したいと思いつき、文芸部を設けて「はまゆふ」という雑誌を出したい、と申し出た時「それはいい、ガリ版刷りなら学校で負担しましょう」と言って下さった短

大の先生。目白の学習院大学に「赤繪」(「学習院文藝」を改題)という雑誌があり、委員長は吉村昭という学生だから、あなたのことを伝えておきましょう、と言って下さいました。

吉村昭は結核で胸郭成形術の手術を受け肋骨を五本も切除しており、進学が遅れていましたが、私も洋裁店をして遅れた入学でしたから、二人とも周りの学生たちからは一目置かれる存在でした。

私は二十八年三月に短大を卒業し、吉村も同時に退学してその秋に結婚しましたが、二人とも小説は書き続け、私が新潮社同人雑誌賞を受賞し、「玩具」で芥川賞を受賞した時、吉村に兄の会社をすぐ辞めて小説に専念してくれ、と申しました。当時は文学賞の公募などなかった時に筑摩書房が太宰治賞を創設し、吉村が応募した「星への旅」が初めての太宰治賞受賞となりました。

吉村も私も学習院文芸部が、文学への出発点です。



自宅にて。後方の写真は生前、ノンフィクション作家として活躍されたご主人の吉村昭氏。

### Profile 津村 節子 (つむら せつこ)

福井県出身。1951年、学習院大学短期大学部に入学。1953年に卒業後、学習院大学文政学部在籍し、文芸部に所属していた吉村昭氏と結婚。長い同人雑誌時代を経て1965年、「玩具」で芥川賞受賞。自伝的小説、歴史小説、エッセーなど幅広く活躍。「智恵子飛ぶ」で芸術選奨文部大臣賞受賞。他に「さい果て」「海鳴」「流星雨」など著書多数、数々の文学賞を受賞している。日本芸術院会員。